俳諧袖珍鈔 後編 三

へ 5
1128
10

俳諧袖珍抄　文之部

梅芭蕉雅

古綾金黙他輯

梅芭蕉雅

冊 へ 5
巻

人くまのおもひ沸のかくれと
ふまりくまのみおもてたうめき
葉ものさびしき蓮はしれくひ
とりにふりぬへきやと幸おお
蝶のひとたはすりくのと
うあをの紙の解脱のうさかくぬ
くくさも絵をこと書の蓮林
をこしてをさくい芭蕉の後を
くくくくい五月のおをおさ
ちをあのあひをさをうを巻
うくされくくのちきりもむし
ちくくくの紙はりえあち
さくて古き流もやをく三月の
蓮屋はおくくくくく板の枝ハと
きみを剣ハ仏の枝ハと
やくくくうくくい紙のつくをさ
くくあのひ地に原て水楼
とめを地ハ不二を弱くて楽門
京をを紙てあめ彩衛に
沸ふをの後をあをえて身を

四方をうくくくれハ初月の
ををうをををとひ面をくく
む名月のををはひをとて先
芭蕉をうつにを楽法しく
琴をおはふくくをふを成を次
と付て風鳥の尾ををさを
紙青房破れて泡をうを
学九をくを学ををををやれ
ら八学四をれをれとも茅を
はくをにかの山中不村の数
木ををくくくをを性をを伝
板素ハ見を筆をくくし
め法横渠ハ新楽をんく
紙学のちくくをくくハ新楽をんく
共ををくくをくくくくくをを
拭ひて風雨をやをれ安をを
おを

宗門雑 終ものをを時の
をを事の秋かりをを文れり

[illegible]

[illegible]

送游天禄序

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

閑閑説

[illegible]

し給てまの〻情をうかゝ中人さう
うへはうこゝやしてゆきゆし
ぬく〻人生七十をまれあうと〻
て身のさうり紀ことをうろうと
二十餘年こはし免の老れまれ
うをと一歌の友のとし五十年
六十年の歌こふくうゆさま
しく〻くつをれて雪踏うちま
紀起しこゝ神さ免の〻の伝
をもをうむさゝふる恵郎ものい
思ふと苦し〻紀悩老して
一箕すこゝもれい見涙の手く
うものこと秋をまて安のつを
あこゝゆく〻今歌の磨界う
こゝろを起し傳位とおれて
はすとゆこゝけと南海老仙
の兵利害を破卵し老若を
ゆすれて南ゆんこゝ老
はものこみとゝつゝ人来
もい世間の論ゆこゝ六他の

家業をさゝこゝもし考敬う
戸を閉て桂之郎門を鎖んと
友あるを友とし兄弟を宿うと
て五十年の紀まこゝ出みつ
く〻採藏こゝゆ
紀のゆや堂を須ゆろす門の極

燎掃説

紀年のこゝうり物のこゝとゆる
こゝ年をたくこゝるれくんすたゝ
紀もゝ十五日すこゝ紀のこゝうさ
けすやこゝ井の屋式を井町の
他ゝゝ赤紀ゆこゝとゝて兵ゆこゝ
の人紀燎こゝ仲こゝゆゝ和こゝ
ろゝれおのく門さこゝて実の
一万を庫ゆこゝかゝひゆこゝ大海こ
乗かをこゝけて姫う性子の上歳紀
さゝんくこゝ紀紀もゝとをくゝ
のゝのけのこゝやくこゝゆこゝ

陽須賀とも云義しさる中ごろ
仲のくしろむおさこうろ目まいろ
あれおの竜の掾の雑れ美人の
下と呼てやそくいは伊と拾ふやと
はや〜味噌と呼ること大男の紙ゐの
ゐる義きこるも詩〜くふ茶摘
のさんおつけれ板ゐ〜けり焼
そうこて田作り能浦漬の茶ゐ
花やうく上下の猿すえゐ〜くる
ゐほとゐ〜くれてゐるいおとを
ありぬ

すもおや芳野〜梅のる解

閑居箴

はゐ〜ゐくるのゐやりころい人の
詩ゐもうるさくくくもすみ光
しくくもすもうしとはまこひ
ゐさちのふゐれと月の歌ちの行
くれのこ友のるさいるもろ
はゐやものもいこひとう海

のこそひとひころうかこ花
はゐ〜はけてきを
星と乱て寄をそ花弟ゐすつ
はゐゐくるはゐの酒や
海のゐいこ移もひ歌の香

自得箴

まくふてこくひこふくこひ
飢寒こつこはうゐて
ゐてこゐ人の歌も人まの芳

机銘

角ゐ机を付をけく嗜雪吹
傳の竜とや〜ゐふ雨ゐ付
芳を面ゐく配こ宮浜天寸
精神を移り都ゐ付巻
こうて義素の元すよたく
こゐすおはつき一物三用を
毎すくこさ八すおもて二尺
表裏とは元つち二の引を彫

うして傳記牝てるの貝ならぬこれをいけて一用とせんや又二用とせんや

惠業寺記　元禄仲冬　芭蕉書

建石銘

人の能をのぶるは好ん紙おのれの名を流とふる礼

銘曰

ものゝくハ磨さうゝ秋の風

瓢之銘　山素堂

一瓢市盛山　自昔稱箕山
莫慨首陽餓　這中飯顆山

叔公のかゝ作こゝもるかさみこも
何ぞ恵ゝうつゝ山路
あゝて家ゝひとつの秋ごとを
見を左くみゝつけて泥今笑
うきんとすれハ大ゝてのゝ
ゆゝこゝぞさゝえまうゝて海

をもゝんとす然いうゝちゝ文
好ゝ何ゝ人日子花のゝみゝ雅
ゝつ花ゝものゝゝりとゝを遠の
位何ゝゝれやゝて用ひて隆生ゝ
ゝもてゝれゝゝをえさゝむ世と
繁ゝ在ゝ泥す世ゝるゝれ山ゝて
おゝゝゝゝゝ山ゝゝゝゝゝ
飯瓢山ゝ老杜の作ゝ地ゝゝ
ゝゝゝゝれの句ゝゝ
ゝかゝゝゝ能をきゝゝん
ゝゝゝゝゝ何ゝ一番ゝゝ
義ゝゝれゝゝ何ゝ一
をゝゝゝ盛ゝゝ
きんゝをゝゝ

物ひとつ瓢いのゝ世ゝの業

栖之銘

こゝかゝゝゝゝれ何ゝゝて橋町
とゝゝ所ゝ能ゝゝゝ月き
ゝゝ泥ゝゝゝ風軽ゝゝや

更科紀行八月十五夜

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

興福寺文科の那珂

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

とうろうをあれはろしかけて
春を重ねて古人かさねとゝ
んめるる
そゝらぬ面や敷すゝきの高ゆれ

吊初秋七日雨墨文

天保六丙申七月の秋風吹そめて
こゝち自農張の茅をひさして
鳥瞰も稽杭をかゝの〳〵一紫桐
を吹打ぬ〳〵き二畳も座敷
をゝしあふ一こゝろひ狩てた
るさんも狩りおろし〳〵と二畳をう
けて〳〵打〳〵遍照小町ら引を
吹すゝ人をこれをうて此二そ
を拾りて雨墨のこゝろを書く
さゝんとす　小ちゝ〳〵
こゝろ〳〵も拾ひや岩の上
遍照〳〵
七夕をかさゝりとし結翁　蕉

雲竹撰

竹の葉門を赤ゝ〳〵竹の葉
竹〳〵ん面あるこの竹まのかふり
むけてこゝは竹を重てこれ撰
をゝとゝゝされれい君い京中
手竹のゝ手ハ既ゝ天十ゝ
ちゝしとゝた芭中にゝく
芭のかゝちを竹〳〵ゝ千見
ゝくゝちゝて撰云をもり
ゝす
こゝ〳〵むけ竹ゝ秋の言

杉折賛

此杉のをれと名付まものい上つ
ゝくゝゝめてゝをゝひめて設
枝葉の美物とゝる折り物つ
ゝ此の山ゝりゝく竹の玉の里の紙
ら拾のかゝみゝゝゝゝゝ
撰題ゝゝとい紀入を呼て
人改上の具ゝゝを竹ゝゝむ

[illegible]

辛崎法師山町契

[illegible]

張仙像

[illegible]

西行上人贊

[illegible]

宋業詳

[illegible]

[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]

むかしのみ
秋風にさそはれてうゑし来の枝

成秀うゑし所の庭上の松をはらひ消
れるもの一丈餘枝上さんをかさ
世紫霞こと所やとりをとりをとりをとり
をはやとりをとりをとり枝を起す
第二位第二位第二位第二位枝を起す
をとく出財牡丹をもすゝる人
弁去をはつ発て他に移り
を作るる人を小輝を及て人
二はつ〳〵そ木材数ハを愛
をとんて枝樂のかゝちをいゝん
時松ひとり春枝に春四財
常盤すして春のもをけ
きをうゝのつ楽天曰松〳〵稽
事を吐成に子家を徒と立
人間をゝろとゝろ〳〵の心を感
するのみ〳〵ハ〳〵長生保養の

事歌を知てやゝ〳〵
為〳〵

元禄四年仲秋日

武舎記

古木枯ふるふ中老い生ル枯
かゝゝりつゝて悪とひ毒
とす鶴霜のゝ毒ねの上
に八駕を奉をぬひものみ〳〵く
やゝの翼を奉をかろ
うれハ千鳥雷に近くゝ
ゆりゝゝ
一物とをんひ人ゝりし
氏紙のふすゝ
世ゝゝもあ〳〵
の雲をいとひ
物をゝゝと思ひて出
みゝといふゝて
さをゝゝし
世事の枯の上に二ゝ

かの月をやとし遥かの空
孫の下こゝの雲あるこゝろ
きりしほをかけて宣そ
みて宵中こゝあひ三百餘中の
嶮難をこゝろ新しく張もこゝろ
くしてみのくまの大地の廣き
る彩も代りひとつまて変
の情をやこゝとなれうれとも
をあこゝまものこゝおくれぬ

幻住庵記

石山のおく岩ほのこしろ
山ゆこゝ分心とそのこゝ
石分寺のこゝを伝ふ人こゝ
幹こゝ行をかゝみ舟をこゝ
て遠国こゝれかこゝと三畝二百
おこゝして八幡宮をのふ
神殿こゝ法殿の尊像とこゝや
唯一の古こゝ苔むこゝ成
面影尤こゝやこゝけ利益の

夢をおもふこゝのふる文面に
りれ人の伝こゝれいとこゝ
さい物こゝの名こゝ
み持こゝの戸ゆこゝ通根新
とかこゝ屋根こゝ破て狐
狸こゝとをこゝ幻住庵とこゝ
ゆこゝの伝伝のこゝ
代数聖こゝの伝こゝ
と今ハ八とせこゝ
中こゝ幻住老人のこゝ
中こゝ市中こゝ
はこゝ
身こゝみの屯のこゝ
間は高こゝ
は異こゝ
ゆこゝ
験こゝ
たこゝ
とこゝ
さこゝ

西鶴市記

山を静かにして性をやしなひ
い動て情をあらはさむ静動二の
万しらせ侯田氏弦久と
漁り山を風流を
すまし蓑を脱
市とゝ門に戒儲をのゝくら
なの門内に入をゆるさんと
まうかの家繁う富をゆ
これ数に二尋くゝ人てあり
旦それ者うして文明なるもの
二万体法二子の俗をつゝて
つもきのうをこ本を植石を
あゝてかゝれもてふれとあす
そもしれもの海内智四方
嗜を去市の紛れとくゝ物を
抱て心上山をむふ物に絶望の
かゝちに似られい私のひゝき
波を為しふひゝの山ひゝの
それをあ侯ゝ見ゝて意

不山を有の所ゝうあんおけを
茶竹の花を数ゝかゝして続
山を見をもふ清流流の
りくにかそれゝとゝ心頭の
俗ゝも又ゝ絶ゝあゝふあゝ
四方ゝう花咲入ゝ侯の湖

十八樓地

あのゝまふうゝ門ゝ法て高楼
ゆりあゝゝを賀宴とのふ
いあゝゝゝゝゝゝろゝく紀山
たゝゝかゝあゝてをう紀壹
うゝ四方の寺八枝の一むう
ゝあくれて岸ゝを民家を
竹のゝみのゝとゝも源ゝ曝
布ゝゝ舟ゝうふ里人のゆゝ
うひ者ゝく漁村酒をあゝ
てゝをひゝ物をゝゝむの
うゝあゝも只此樓をもく

[illegible]

唐戦日記

元禄四年辛未卯月十八日晴

[illegible]

[illegible]

[illegible]

机一　枕　文箱　白氏文集

[illegible]

源氏物語

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

うくやのけしきも眺りよ仕人
物ごうおくもりあるおくおとろ
れて殘は眺り眺さり爲ると歌の人も好く
さ東おくよ詠るを歌の人も好く
屋眺くれい歌もねるを眺ぬや
に初住能をそ出拵さる衣物を
見物しをおくさるを清書す
廿二日初の万雨降てるの人おか
くさひしきすにもさしを
極ふ貫河
表ゑ拵るものい絵しをゆる
しとと
酒を飲ものいさのしる繪を
と
熱ゑ仕するものい絵をゆる
しと
徒然ゑ仕するもの丸仕れ
とをとす
さひしきおくいくのしすと
西上人のとみ仕るいさひしさを

をあるいしゑ又考る
山里ゑこをやゑ淺をうさとり
ひとりすみんと思ひしものを
弱ゑむ淺とおるしるを形忘備
頂士の四充いぜの雨を仕るい
充ぜりの家をくしあと素毛
武と繁を常ゑ仕るを乳む平安又
うき家をさひしうをかへる
とを仕る寺ゑ弱原しもひ色
巻者を素より淺名すしの氏
江より詠く仕をして用文門人の所
身をも仕るさとくを年必ゆ
状ゑ平の住稚し芭蕉の田仕を
見て宗波ゑ東でし
むの絵小稲仕るひをを乳
又云
乗仕とろろ杖二丈をろに
しを極一年永いはを木色を
人人と出く
ゑの極素色ゑもしさろ

[illegible]

物者の[illegible]

[illegible]

廿三日

[illegible]

[illegible]

[illegible]

麦の穂や[illegible]

[illegible]

[illegible]

廿四日　[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

廿五日　[illegible]

文草[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

廿六日

[illegible]

廿七日 人馬[illegible]

廿八日 [illegible]

[illegible]

[illegible]

[

[illegible]

二日

[illegible]

三日 [illegible]

四日 [illegible]

[illegible]

伊賀大佛記

[illegible]

[illegible]

[illegible] 上

[illegible]

白髮吟

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

うしも出でく思ひとのこゝろ
くみわかて
古さとや牆の蔦に浅きのゝ
ふ

幻住庵跡

五十年やそちの不分は若松の
志本に帰りて幅半のかゝを
うしれひみの中にのをとゝ
て打ながめ行くさまを物ゝ
かの宗瑞ゝたくことを能因の
松島白河を面とせし海度れ
侍山に被をぬ仮枕若葉の
外の涙垂てうゝ入ぬる面を
ひやゝんゝとをきうまもひ
立侍ると同行曲水ゝ
ものゝ面ゝ
うえるゝ
和ゝう
ゝ

海の内ゝ
ゝ
の
ゝ
ゝ
ゝ

のもてめられ侍しし吸物り山菜
れてかりて味をまもしてをほと
右〜名のたりきへ物をまに本郷
のつくともてそ〜のつこを郷をき
ひ〜うをを野とひとうろこ
そ〜ろこのこそ長楚東南の
ふるめに船に乗ぶ江もうにこち
けーまやひえの山は良の宮根に
里かり湯の松い外をこそ流て絵
所の煙八本万さのやき野田の
榜に富く乳て栗ぼの松系コメ
りを飼す三上山八不二の貸に
よりてむさ〜弁の古かすもも
思ひ出〜紙四上山に古人を考
如さほを於ケ丈多海をこの
うと云山河り笠取山に笠八
ふくて恵ぼの里人のをやろう
やけん狩をさ脱平くよふ〜ん
とうしろの峠にをひの浮り松の
捌作り茶の茶中と黄てこれを

猪の掠のけと名つく供へきぬ除
走る後棠茶の飲楽も市に在て
かやひすくに生を人を蒲崎
の往ひも夜を終てうやむう
以為母に中ふをひ〜ぬて晴
き辰新に風をひひりてやそれ
まくしすくやあるる時に鞠に拾
ひ浮あをむそふに遊茶ひとり
茶のみとりをつ〜ふとくしの中
をもひて一題のそ和ひと暗く
おに往ゆる人もさ〜うこ天
くあくこけるおすもも好〜
お仏号を為てそくるのお
かく〜ふ人ま変那といさう毛の
ら人てさるをそ良山の侍宗海
に上るのひ〜を酒る人をさ
敬をこふいとやす〜うに番を
てそ幻往尼の三字をおくる
廿表に八月に名をきくほんん
人のかさ〜もあれ〜ゆう山屋と

ひ旅ねとひさをゝ[illegible]
[illegible]の昔くのはう枕の上の板にうみ
さりひるゝやゝの[illegible]の[illegible]の[illegible]人
[illegible]と入[illegible]て枕の編こひゆし
兎の豆[illegible]かゝ[illegible]
ぬさ[illegible]
[illegible]人も[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

き茶屋に集りおのゝもそこにも
おいて風ぶりてこに二三の若の志を
〳〵発さんやまりてをみの友と
する人も嘆こゝのそころさしを
志れくいすくて鉢中八仙の遊びを
らんやとをやつれし社ぬくて心
をつくろはぬ友をひいうく角ん
の花のやとに思ひ中社をの花
に浮世のあの俗世をそそり
茶くるゝ友をそもひの身は
かくて三笠の興に寄せ海のの
月に舟をこゝのへんともものこのむ人
の風情をそへくさゝる枝に軟菓
社角をいかけれとも扇に茶瓶
のみの男はれいに赤壁の舟のも
しさをいはゝ〳〵さえりさて和や
初の涙の名ゝ〳〵出に洗のも
こゝをさゝしに匂ひ枝に横川の
枝につゝ折りてはこのそれ浦
をもかそへつ百〳〵しろに高の

嶂をくゝ石山の峰に葉はの花に
さそんてをそそ柳橋の雨も春のん
夫稽の海帆をそひをもそもなは
仰ぐこゝへ
名月や池をめぐりて七小町
されいに赤松の紫式部に石山に源氏の
俳をこゝつ〳〵絵の義居士に西鶴に
拙女の旅ひをあ〳〵山ろれも花の
名に誇てをのかなろ〳〵ほさん
や宴をも秋の名蹴ありけし
さそ松に舟をきゝとをて茶屋の
榛千に空をそふてを月をは遊業
の水を隔す夕内に業の高に
うを庵の所の森の風も問ゝて
松江の鐘にをひあるをや狂をを
かくふく月の名残に幸崎の私
もひとりやきる古に新の名をゆ
のしれい尾花川の海けの
をとろゝをみ歌尚白をおとろ
ぬれい歌にをや五更をを

三井寺の門さしてやはらの月
やまとよ拾穂のむら〻ぬ舟と
こゝもしの越ひとおもへいかに
金うを文章をもはさひ貫ぬ
詩歌をもとゝのへぬき訪人を
しるべとしつゝ人おもはぬ
矢の根とりて世に人を動
屋あやとゝあめもろこしとおもふ
とりしてを育の風俗をはつ〻
浦に月を長等山の木ゝ
入あ

既望と題

七月の詩無文武や中に今實
二三のこのさあれて和をかゝれ
庫をもて月も半をうれのかと
あるんなりゝ赤壁とのゝ人の家
の後ふ清の風て舞羽狂雲月
にうれて其れあると船の中
うゝをしふよそふうゝを

高殿おとろかせ後ひて屋成
ゆ紅ちをそをそふ秋の江風
華ありさを物ゝの新の切目
ゆ〻さ〻ふし物ゝ次やそ岸よ
物をあ〻〻遠との屋をを九〻
いさ月れ高を屋を月をけ
をもむくはをて開上を和やふ
思ひれ重きさ紅仲秋をの
月を月のはを屋をふはむ〻ふを
後山をふあ〻比を有をを
あう陸しとかの上の樹
はれを三上水芦を左をふ日れ
てれ乃ふ十二峰の紅をひた
三ふ〻ふをと月も三年みて思
屋乃うちふ〻れをれをいもち
後山とのふるををはれとは
しれ無ををくておう〻ふのか
こ来とあをを屋ををを月のををを
切れ〻やそを月のををを
ふとを面を玉帳の紅をこを

[illegible]

[illegible]

[illegible]

こゝにともゝうの蓮ひめうん結ら
墓の松を伴くさまをやうう上戸
ハ長くく人少ゝ日をめくゝを日数ら
嶽ゝハ及挽の名ゆうて赤とあ
もゝんものゆゝハ氏至中めゝさ
ゝゝと抽出ん三ゝ三て赤の結に糸
ゝ小杯のゝけゝかゝれて月ゝる
の入おゝ此ゝくゝれをゝもは
ゝうゝあり

烏賊

一烏小大ゆゝて名を矢ゝすゝ
と烏鶏とゝひゝ大と蓋をゝゝ
ゝゝ及浦の巻を後ゝて名中
の曽ゝゝ比すゝ武ハ人命ゝゆく
人をつけ紹ほゝ麹をゝゝて
二里の蝶とゝのゝ武ハ大ゝの
やゝうをゝて巻尾をゝゝ
系をゆゝくゝむゝをゝくゝを
けゝのゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

へゆくゝんと結彩の才士も情ゆゝ
ゝゝひゝゝ結ゝも出れてかゝち
を来ゝす只金杯のゆゝゝゝ時
ハゝ酒大ゝ又ゆゝ花をゝゝ
ゝ射ハゝ酒中ゝゝゝ宴ゝ
大ゝ筒中かの膏ゝハ性倹張
魚ゝして筒ゝの麹をゆゝゝ
筒ゝの瓜のゝゝをおゝれ
ゝ肉ハ酒ゝの味も好ゝゝ
黄ゝのゝゝも紙帳時ハ人
不ゝの宴を抱てゝ紙宴
をひゝて慈をむゝゝゝ
てハ東榜の稲をゆゝゝ
ゝゆゝてハ田畑を貴す結ゝ
幸善の勢をゝらゝ武荷
のかひこをつゝみ池の蛙を喰ふ
人の戸をゝゝゝゝの結をむ
ゝゝゝて結ゝハ乳ゝゝのゝ
をゆゝゝゝ結の外をゝて
ゆゝゝを作ゝ色ゝれゆゝ

ふることを大こうして其智をせめこ
ゆやまりこゆのことを心会歌す
てかさちを是こ海さこ人こゆう
さく麦俗とゆう歌氏もこれを怪を
俗士も甚ことむ所在ゆこく作こ
しゆ渠ゆ矣ん こうして三巳の
今鳥こ花を〳〵れんと欲

伊羅神集序

尾陽蓮左樵木半こう人号
子集を伊みて名を伊〳〵神と
云伊布こ武こ名伊ることを〳〵
子ここうこ氏おもひやこことを武
ゆこ拾ねを〳〵おりしの日ひ拾伊
つめて弟れりとゆ廿日新おつて
やこ左の日又弟このやこ実
こやきこ〳〵ゆやこひの京こ拾
拾のゆ〳〵を伊〳〵そひ拾その
おのゆこさゆ〳〵ゆしある飛情こつま
ていこ〳〵宇こをこゆふものも伊

れこ子や糸遊のいこのすゆ形こ心のを
のゆこゆ形こ〳〵ゆこたこうこひゆれ
にもつ氏を寝の大おここれもて
平こ左のきこ中ゆ形を〳〵ゆのこち
ゆこ人ゆんと武野の原れ神ちこを
ゆれこ人〳〵

銀河序

中陰をこゆ形して城拾ゆを伊
とゆゆここゆゆこゆるかの伊波ゆ西を
河の西十八里余波を隔て東西三
十五里こ横たゆ〳〵ゆ峰の峰巒
谷のくゆしゆてさゆこうこひゆる
こうゆ河きゆ氏ん こきゆ
武ゆを美重知ゆくゆて伊ゆれ
妻のくゆのこゆゆれいかきゆ形こ
めて彼ゆここて伊こを大飛彩数
のゆくひを伊を〳〵ここうて
氏ゆこて〳〵しこゆのゆて伊くゆ
ゆこをゆのきこゆこ思ひて見れ

伊勢紀行跋

虛霊集跋

霊とは一書甘味四味

夜の杜に心酒を飲えて美しき山氏鶴

とすてつこれをうして其白つゝふ

けつゝ毎さくきくに老ー

俗と風雅のその世ー味ーゆゝ

西門の山ゆを見て人のひろてゆ

独楽や

恋の情つくゝえとりひとりーハ西行

ゆり独の秋を黄金、稼ルヲ嘆ヲ上

陽人の望の中ゝ六位物ゝ者氏の

うゝ十七ゝ

下の和ゝ六眉ゝ親そひの娘要

姑のゝけゝ味ゝゝそひをゆつゝゆゝ

史張義の子孫の作なども於ず白
氏う安と仮字やつして初心を
教ふ中より好んで
其詩寒郊寒瘦を主とし氏愛
の門に白を始へ詩の骨子を
と沙ふ乱心他の中うしたゆ
世う実ゆてはのめすめと待

外月の平沈次子の浦一人すうし
ろ孔山人樂こくるけく月々
いせ流て恵の名詩も多れ
うし兵庫海のすをハ秋を中と
することやはこ物のたしめ事
しきあれ
友を訪れと帰るの中めし月
義をやとて祝さしとあく人　芭蕉
さをおるふと浦のとくをよ　去来
さくもその中浮さしハ十を

ト恵の氏敷ての寺を思の松つ
中ヤりれ拾夜ゆけ四五西ひ生
を鉢の去とゆりてやをうハふさ
ありけ　橘士義
友子やはくものとゆう夏の河と
四中一末月中ようて夜書れか実
ふ人ハ子ゆくいすのとふ人も
あけ見いかの巻行全平れ新姫
ハくしめてやうう作く
とふ人もゆかいつ冊のをのくう
家のくうう友とふくく先
又れいうりむくの家のとくを
見ひくくれて独をもなけよ
人の月のをれゆひをけし幸
くくてくくくくを人をそ彩よ
のう姫の君月中ようしのちほれ
く於本うれ月中ようれハ
月一夏ゆ矢を加さてかさ糸の
心やくくもおゆやゆくう郎

又さすがに忍れうるおやのこゝろ哀の
ものときこえゆく笛の音のうの中
五月十八日夕べの薫物こそかの
香ゆかしうおぼえ人を思ひ知く
かゝひうゝ人の文形のまゝ入て
そのえんそうゝきこえぬる
河しゝひゝの人と書のまれて
ゝの堤をすゝおうゝゝん
のゝれすむみのを山のゆくれさを
私のゆゝゝに涙もつゝくゝ

歌ゝゝ

拾ぬゝゝすゝゝゝゝ名ゝゝむを
ゝゝゝやゝのすゝゝゝゝゝゝ
えんうの歌

とゝの秋はゆくすゝにを行ゝ
秋の夕けゝゝゝつゝの秋
ゝゝとゝ山めゝさやゝゝゝゝも
すゝんのゝゝゝゝおゝろゝれぬる

夫人東歌ハ後代ゝして廿人祖父
ハ別堂四の農士竹氏と称す
後代とゝいふものハ晋ゝゝ母方に
よるものゝゝゝしゝゝゝ七十第二
とをの秋の月をや欠る老の涙
ゝゝ見て花ゝの情ゝをかゝゝ
見るおもひかきゝれ林の庭と
ゝゝて神ゝゝれに移ゝさし
ゝの句をかゝゝとゝして大学的
典の基にくゝ云ゝし時勝を
学びて恒の産とゝ女作集
の男ゝゝ俸禄をえて答恵親
蓮の愁すくゝゝされとも世俗
をゝゝひて名聞の名を渡り社
を折て業をすゝ販ゝゝ十年
のけゝめゝ市店を山形ゝかゝ
ゝゝゝむゝ筆を校さ仮机を
さゝゝぬゝゝ修ゝゝ筆乃
すさゝい車ゝゝ序ゝゝゝゝゝゝゝ

上ゝ生れて京都ゝ住とる先
祇園大路新市のゝ人家の戸
入月は法ハ机の四隅の事